

第 30 回 JASM 教育セミナー

「質的研究の肝は“アライメント” ～ASEAN 諸国における体育教員の育成支援を通じた研究より～」

佐藤貴弘（筑波大学体育系教授、国際ジャーナル『Quest』誌 Associate Editor）

2025 年 8 月 22 日に開催された JASM 教育セミナーでは、筑波大学体育系教授の佐藤貴弘先生がご登壇。「質的研究の肝は“アライメント”」と題し、ASEAN 諸国での体育教員育成支援を通じた研究を基に、質の高い研究に不可欠な要素について講演した。

佐藤貴弘先生の経歴と研究の原点

佐藤先生は高校卒業後に渡米し、オハイオ州の大学を卒業。ハワイ州の小学校で体育教員として勤務する中で、多様な人種や文化、そして障害を持つ子どもたちと向き合った経験が研究の原点となっている。特に、自閉症の児童との関わりで「この子の行動は障害によるものか、本人の意思か」という問いに直面し、答えの出ない探求を続けることが研究の面白さだと語る。その後、歴史的黒人系大学での勤務などを経て、現在は筑波大学で教鞭を執りながら、インドネシア教育大学客員教授や国際ジャーナル『Quest』誌の Associate Editor も務めるなど、国際的に活躍している。

質的研究の肝「アライメント」とは

講演の核心は、研究の質を決定づける「アライメント（Alignment）」の重要性である。アライメントとは、研究のタイトル、目的、理論、リサーチクエスション、研究方法、結果、考察といった全ての構成要素が、矛盾なく一貫して整列している状態を指す。佐藤先生は、アライメントが崩れた例として、性的マイノリティに関する中学生へのインタビュー研究を挙げている。その研究は、質問項目が対象者である中学生の発達段階を考慮しておらず、結果としてデータの質が薄くなってしまった。これは、研究者が自身のトピックに集中するあまり、対象者の背景や特性への想像力を欠いたために生じた典型的な失敗例と結んだ。

ラオスでの研究実践と質の高い研究への要点

佐藤先生は自身のラオスでの体育教員への調査を例に、質の高い研究プロセスを具体的に示した。体育用具が絶望的に不足し（例：ブロック塀の破片を砲丸代わりにする）、体育の専門用語すら存在しない現地の状況を理解するには、研究者の主観的な「視点」だけでなく、物事を客観的に捉える「観点」と、あらゆる可能性を考える「想像力」が不可欠だと強調。結論として、優れた質的研究とは、研究計画の段階で対象者の背景を深く考察し、アライメントを徹底的に整えることで実現される。これにより研究者のバイアスが減り、データの信頼性が高まる。先生は、このプロセスこそが研究の質を保証する最も重要な「肝」であると締めくくった。